

教育の充実：多感な時期の学校教育

（「いのち」の大切さ）

若尾 久

（NPO 法人いのちの教室 理事長）

2018 年 6 月

みんなのいのちが輝く社会経済研究会

（中道研究会）

要約

1) 私たちは社会生活を営む上で、今多くの課題に直面しております。地球温暖化、自然環境破壊、自殺、貧困、差別、企業不祥事、等々の社会不安、更には、紛争、殺戮行為、虐待等の生命を軽視する社会的事象が顕在化しております。このような課題を解決するためには、正に“心の在り方”を問わなければなりません。私たちが持ち得る本来の心のあり方は、受容と寛容と労りから醸成されるものであり、今、正に私たち本来の心の在り方に気づき、心の回帰を行う時です。

2) 生命の視点が希薄な社会では、地位、名誉、金への固執が拡大し、その結果、“退廃と浪費”の経済が繰り返されて行きます。私たちは、“何のために生まれて来たのか”、“どのように生きるのか”、“死とどう向き合うのか”、と言う、命を視点とした自己への問いかけを根底とした存在的意義に気づくことで、自己創造への道標を確立し、正に、今生きている意味と意義を自然体で見出すことが出来る存在です。命の視点で、全ての事象を見ることが出来れば、全ての事象の起こる意味、意義が、今までと違った形で見えて参ります。単なる事象から、自己の存在意義、そして社会全体を真に豊かにすることができる生命力と可能性を見出すことが出来る事象に変容して行きます。

3) 生命の視点で全ての事象に触れることが出来る感性は、教育により初めて現実味を帯びるものと捉えております。地位、名誉、金の獲得に指標を置いた知識偏重の教育ではなく、生命の視点で全ての事象に触れ、そこから、“生きる意味、生きる価値、生きる意義”、を見出すことが出来る心の在り方に気づく教育を実現し、実践して行く社会環境を構築して行くこと。その教育から得ることが出来る最終的な意義は、「愛」であります。現在の社会が希薄となっている「愛」の存在を今一度見直す教育。これが私たちの存在使命と考えております。「愛」という意識が芽生え、触れ合う機会が自然な姿となる社会では、政治、経済、文化、教育・・・等々が、全ての人を真に豊かにする社会と変容して行くのでしょうか。

キーワード

命の授業、教育、生命、愛、利他の心、真実、心の成長、意識改革、自己創造、今を生きる、いじめ、CSR、子ども達からの学び、パラダイムシフト、猿渡瞳、魂の叫び、感謝、使命感、気づき、知恵、生命プロセス、金子みすゞ

<目次>

<はじめに>	4
1. 生命に寄せる思い	6
1.1 社員との触れ合い	6
1.2 子どもの世界は大人の世界の写し鏡	7
1.3 命への問いかけ	8
2. 生命を視点に置いた改革	9
2.1 意識改革と生命	9
3. 「命の授業」	10
3.1 社会的背景と「命の授業」	10
3.2 「命の授業」、三つの視点	11
3.3 「命の授業」 概要	12
3.4 「命の授業」、実践初期の出来事	13
3.5 「命の授業」で紹介する少女の生き方	15
4. 子ども達からの学び	17
4.1 命を語る子ども達	17
4.2 「命の授業」への思い	18
4.3 心の中から引き出す授業	19
5. 子ども達の変化（行動を起こした子ども達）	20
5.1 子ども達の劇的な変化	20
5.2 学校長から頂いたメッセージ	21
6. 「命の授業」への感想	21
6.1 子ども達と担任からの手紙	21
6.2 命を喚起する授業	23
7. 生命とは	24
7.1 生命の本質を考える	24
7.2 金子みすゞと命	25
8. 子ども達の価値観の変容と経済への影響	26
8.1 特別授業に見る子ども達の意識	26
8.2 心の傷ついた子ども達	30
8.3 子ども達の心が繋がる経済への影響	31
<おわりに>	34

教育の充実：多感な時期の学校教育（「いのち」の大切さ）

<はじめに>

私たちは社会生活を営む上で、今多くの課題に直面しております。地球温暖化、自然環境破壊、貧困、差別、企業不祥事、詐欺、市場操作、等々の社会不安、更には、紛争、殺戮行為、虐待等の生命を軽視する社会的事象、又、子ども達の世界に於いても、いじめ、不登校、自殺等々、様々な問題が顕在化しております。人類の歴史を振り返ってみますと、人類は長い間、“戦いと奪い合い”の歴史を繰り返して参りました。時代々で、その状況は変わってきておりますが、残念ながら、私たちは歴史の示唆する重要性に気づくことなく、その“戦いと奪い合い”は姿を変えて現在の社会生活の中に住みついてしまっているように感じます。現在の社会状況は、原始的な獣的性質の支配から抜け出せなくなっているといっても過言ではないでしょうか。いったい、何時になったら私たちは、争いのない幸福感の満ち溢れた平和な社会を創造することが出来るのでありましょうか。

人類の歴史を鑑み、そして、現在の社会状況の中にあって、私はこう捉えております。それは、『本来、我々人類は幸福感の満ち溢れた持続可能で平和な社会の構築を可能とする力、正に真の生命力を持った存在であり、誰もが心から享受できる社会を創造することを可能とする生命力を持っている。命に関しては完璧な存在である私たちである』と言うことであります。では、何故、真の生命力を持った存在である私たちは、人類の歴史の中で、多くの負の遺産と将来への不安を作り続けて来たのでありましょうか。私なりの答えは、『命に関して、完璧な存在である自分自身であることを忘れてしまっていて来ているから』と言う、いたってシンプルな思いであります。そして、このシンプルな答えこそ、真の人的特性に問いかけ、生命の本質に触れることが出来る心の“こだま”のように思います。

では、何故その様な状態になってしまったのでしょうか。それは、社会資本（本来、人が人らしく生きるための支援要因であり、持続可能な社会を実現するための、文化、自然環境、そして社会的インフラ、社会制度等を包含したものと認識しております）の偏った運用が増殖され続けて来たからだと思わざるを得ません。本来の社会資本の持つ意味は、すべての人が幸せと平和を享受できる生活を送るために運用、存在すべきであります。しかし、一旦、経済至上主義の社会を維持するための手段として作り上げてしまうと、地位、名誉、金への固執意識が増殖され、生きることへの意味、思い、そして価値が心の中から離れて行ってしまうこととなります。その結果、「衣、食、住」と言う生活手段への固執、そして自己資本を増やすことへの極端な偏重意識が醸成され、生活に必要な範囲を超え、潤沢な享受を求め始めることとなり、「退廃と浪費」の社会を作り上げてしまうこととなります。

私たちは、何時の時代からか、人生の価値基準を物質的所有と、その拡大に置き、不必要な競争を煽りながら適者生存の社会を創り上げて参りました。その結果、創出されてきたものは、本来の文化的、社会的基盤をなす心の成長とは程遠い、“営利至上主義”であり、“孤独な群衆化”であり、そして、“環境破壊を含む様々な社会不安”であります。

このままでは社会環境、そして地球環境は破壊の一途を辿って行くこととなります。社会的不正の増加、生命を軽視する様々な行為、又、環境面では地球温暖化が取りざたされている中に在って、今、私たちは地球市民として将来へ向けて抜本的な対応を迫られております。これらの事象は、固有の出来事として起きてきてはいるものの、その根幹にはそれぞれの事象に共通する要因が内在するように思えてなりません。これは、技術論でも無く、形式論でも無く、正に“心の在り方”の問題と言える様に思います。心の在り方を取り違えてしまった個人、集団は自ら気づかない内に、社会不安或いは環境破壊を、様々な社会的事象として創出することとなります。私たちが持ち得る本来の心のあり方は、受容と寛容と労りから醸成されるものであり、又、コミュニケーション活動から生まれるものであります。そして、人として存在する根源としての「生命」への神聖な感情を捨てて来ってしまった社会全般の在り方にこそ、起因する要因があることに思いを寄せざるを得ません。

“図 1. 負の遺産と社会事象”に示すように、自己利益の追求が優先する社会環境下において、様々な好ましくない社会事象が誘引され、負の循環が構成されることとなります。行過ぎた所有と、消費と、そして、廃棄が社会資本の浪費を助長し、社会的退廃を招いております。その結果、社会環境そして、地球環境を取り返しのつかない状況に追い込もうとしております。破壊は一瞬の出来事です、創造には長期間の努力が必要となります。又、大人の世界の写し鏡である、子ども達の世界に多大な影響を与える事となったのであります。私たちは、将来の社会環境そして、地球環境の在り方に大きな責任を負っています。生きる意味、「生命」の意味を今一度噛み締め、社会及び地球環境への関わり方に思いを馳せていくことが求められているのではないのでしょうか。

このように、多種多様に渡る問題（物質崇拜主義、適者生存、際限のない競争、営利至上主義等々の負の社会的事象：下記「図 1. 負の遺産と社会事象」参照）は、社会及び地球環境破壊への流れを創出すると同時に、社会の映し鏡である青少年の世界にも、“自殺、不登校、虐め、暴力”等々の心の不安に形を変え、多大な影響を与える元凶となって来ました。このような歪められた社会循環を軌道修正する為には、私達は、生きる意味とは、生きがいとは、未来への展望とは等について、新たな社会創出を通じて自己創造を実現することで、社会全般との関りの中に発現して行くと言うことが必要となって参ります。更に、人間の心を発現する思考、言葉、そして行為は、すべて、家庭教育及び社会教育の在り方に依存するという観点から、教育の活動の中に新たな社会創出の芽を見出して行く事とし、その指向と実践をすべての存在の根幹にある「生命」に置きたいと思います。そして、私自身が約 10 年に渡って教育現場での授業、及び地域での講演の形で全国展開して参りました「命の授業」の体験を通じた知見に沿い、以下、論を進めさせていただきます。



図 1. 負の遺産と社会事象

1. 生命に寄せる思い

1.1 社員との触れ合い

論を進めるに当たって、何故、私が「生命」への思いを強くしたかについて以下、綴らせて頂きます。

私は長い間、企業に在籍し、営利を追求する環境にありました。企業として、一定の環境保護活動、外部団体への資金援助等は行われておりましたが、営利を主体とした経営環境で本当に良いのだろうかという疑問を持ち続けておりました。悶々としている中、2000 年に入り、国際的に C S R (Corporate Social Responsibility: 企業の社会的責任) の概念が広まって参りました。企業は営利追求だけでなく、地球環境保護、そして、社会貢献の実践にも配慮することが強く求められて参りました。2003 年が日本の C S R 元年と言われております。悶々としていた思いが一気に融解して行くと同時に、企業に在籍する環境下に在りましたが、人として何かをしなければならないという思いが益々醸成されて行きました。この様な思いを持ちつつ取り巻く環境を見た時、悩みを持ちながらも業務に邁進している多くの社員の存在に気付いたのです。

多くの社員との触れ合いの中で、様々な立場に置かれている状況を垣間見、触れ合う中で、人としての“潜在意識”、この言葉が適正でなければ、“本質的意識”と言い換えても良いかもしれません、人として本来持っている意識に触れることが出来たのです。その中で最も強く感じたのは、“自由、寛容、創造”への思いであります。個性ある存在として、その人なりの潜在能力を醸成するための重要な役割を社会環境が担っており、その個性が十二分に発現される、その先に自由があります。しかし、営利目的を核とした行動ルールに呪縛され

た環境下に在っては、個人の自由性は薄弱なものとなって行きます。

又、行き過ぎた営利追求の環境下に在っては、個人が成果を評価される環境が整備されて行きます。定量性に重きを置いた偏重で行き過ぎた評価主義により、本来、個人が持っている、人として相手のことを思いやり、共に喜びを分かち合うという意識とは、大きく乖離した環境が醸成されて行きます。

現在の環境下に在っては、成果はどのくらい、地位、名誉、金を得たかで評価される。正に人生価値そのものが、行為の結果として得られる所有物の蓄積量を基準として評価されているのです。しかし、命を生きる私達の真の成果は、どのくらい人に与えたかで測られるものなのではないでしょうか。生命、或いは生きると言う事は、最大の所有を得る事ではなく、最高なものを与える事のように思います。

又、人が本来持っている創造する力、言い換えれば生命力を発揮することの中に人が人として存在する意味があるように思います。個人の創造力が、大きく埋没するような枠組まれた制度の中では、没個性が助長されるだけで、喜びを感じ得ない環境に置かれて行くことになります。営利至上主義が優先されることで、先に述べた、“自由、寛容、創造”の三つの人としての本質的要素が阻害されることとなります。そして、営利至上主義から創出される環境は、長時間労働、パワハラ、セクハラ、うつ病、休職、企業不祥事 等々の、正に持続可能な社会創出に対する負の事象であります。優良企業と言われていた複数の企業が社員を苦しみ、更に企業不祥事を起こしていることに、営利至上主義の持つ悲惨さと残酷さを感じ、胸が痛む思いが致します。

この様な思いの中で、早期には変革できない現社会制度と言うことを認識しつつ、それでも生きる力を提供したいと思いで、精神的に大きな痛手を負った多くの社員と触れ合って参りました。社員の命を救うことが出来たと共に、その社員の家族の生活も守ることが出来たことに、今思いを馳せております。又、多くの悩みを持った社員と触れ合う環境の中で、人としての在り方、生きる意味、生きる価値について、私自身、多くの事に気付かせて頂きました。触れ合いを持たせて頂きました多くの社員には、心から感謝しております。今振り返りますと、人が心から望んでいる思いに真剣に応える行為に対しては、それを超える程の生きる価値を与えて頂くことが出来ること、正に「生命の力」を頂くことが出来ることを強く感じさせて頂きました。又、人と人との出会いの真の意味に気づくことも出来たように思います。

1.2 子どもの世界は大人の世界の写し鏡

このような体験後、私は、また新たな環境に入って行く事となりました。当時、子ども達の受け入れ見学を行っていた時期でもあり、子ども達への関心は少なからず、他の関係者と共に共有していた時期でありました。一年ほど活動が続けていく中で、新聞・テレビ等で、子ども達の世界が変化して行く報道を目にする様になりました。連日のように繰り返される子ども達の報道に触れ、今まで感じたことのない大きなショックを受けたことを思い出します。子ども達が自ら命を絶っていく報道、学校に行けない子ども達、そればかりか、子ども達が子ども達の命を奪う報道がなされる様になりました。

今まで、組織の中で働く社員との触れ合いを行って来た私として、大人の社会で起こり得る事象が子ども達の社会にも起こっている、その実情に驚きを隠すことが出来ませんでした。この様な状況を看過することはできない思いを強くし、子ども達の社会に一石を投じることを決意致しました。そして、マスコミの報道等を通じて、私なりのあることに気づいたのです。それは、元々子ども達が悪いのではなく、周りの大人が、そして大人社会が子ども達に負の意識を投影し続ける環境を創出していることで、子ども達の意識が負の連鎖によって変化して行ったということです。つまり、子どもの社会は大人の社会の写し鏡であるということです。子ども達の負の行為を頭から非難する前に、大人である私たちの発現する事象の根源に在る、思考、言葉 そして行為を反省しなければならないのです。

様々な社会的事象に、若者の意識と行動は多大な影響を受けているのです。子ども達は誰もが幸せで充実した人生を送りたい、生きていること、そのこと自体が幸せと思いたい、そしてそれが実現する社会であって欲しいと、心から願い、或いは必死になって実現のための行動を起こすのです。しかし、社会の壁は厚く、多くの場面で子ども達の心からの願いを跳ね返してしまいます。現実の世界情勢、又、過去の歴史がそれを物語っているように思います。心からの願い、或いは必死の言動にも拘らず、社会がより良い方向に変化していかないことに気づいた子ども達は、社会的高壁に対して、意に反して自己逃避意識を身に纏い、自己の存在を維持する為、もがきながらも社会に迎合せざるを得ない意識を形成していくのです。

こうした事象を放置し、看過することが出来ない思いを強くしたのです。この様な中で、私は、将来の社会を担う子ども達に直接触れて行くことが、大人としての責任行為と認識し、教育機関に直接出向き授業を行うことを決意致しました。どの様な授業を行うことが子ども達に気づきを与えることが出来るのかを熟慮した結果、子ども達に「生命」について触れてもらう為の授業が心の中に浮かんで参りました。（「生命」に触れる授業に付いては後述の＜命の授業＞で詳述致します）

1.3 命への問いかけ

私は、CSRの視点で複数の企業と触れ合う中で、講演及び直接指導を通し、CSR体制の構築、環境及び品質マネジメントシステムの構築・改善に携わる体験をさせて頂きました。その中で感じたのは、取り組み活動に関して、方法論が優先され、本質的な活動の存在意義を自覚、共有する場に触れることが少なかったということです。形作りが優先されるばかりで、本質的な意義を自覚しての活動とは程遠いものでありました。方法論は手段の一つではありますが、社会事象を変革する上で最も重要なものは、本質的な部分を顕在化し、そして、それらを変革するための「意識」そのものである様に思います。取り組む活動の存在価値、意義を明確に自覚して緒事象に対応することで、本質的な意義を付加した活動となって行きます。言い換えれば、「何のために行動を起こすのか？」ということへの問いかけの活動であります。

現在、私は活動の一つとして、人権にかかわる活動に携わっております。人権保護活動を

進め様とすると、往々にして、“人権とは何か”、“どのように大切なのか”、という言葉の定義、又、保護の為の方法論に中心が置かれる活動となりがちです。方法論は、人権保護活動の中では、大切な要素ではありますが、“何のために行うのか？”という本質的な問い掛けがなされないまま推移してしまう事になります。「何故、人権が蔑ろにされるのか、どのような状況下でそのようなことが起きるのか、どのような立場の人たちが人権を蔑ろにして来たのか」という問い掛けが欠落されることで、本質的な取り組みが出来なくなる環境が醸成されて行きます。この問い掛けがなければ、「人権は大事だから守っていこう、このようにして守っていこう」と言う活動範囲（もちろん、方法論が論じられることで、人権を保護する体制構築は少なからず可能となるものと理解しておりますが）から自由になることなく、本質的な変革、抜本的な変革とは乖離する環境が醸成されて行くのではないのでしょうか。

このような思いを持ちつつ、様々な社会事象、環境、人権、貧困、紛争、企業不祥事、自殺、等々、様々な根源に目を向けた時、私の心の中に浮上して参りました「テーマ」が、全ての社会事象が共有するところの「生命」でありました。社会事象の各論を論じる前に、「生命」への関心が付加されて初めて諸活動の論点がその本質に迫ることが出来るのだと気付いたのです。

「生命」は“大切なものだから、しっかり守って行こう”、“簡単に亡くすことがない様にしよう”、等への取り組み（もちろん重要な取り組みであります）が、なされてはいるものの、“何故、命が大切なのか”、“何のために生きるのか”等の問い掛けが社会的に又、教育機関に於いて、あまりなされておらないように感じております。「生命」の本質に触れる事の必要性を問いかけて参りたいと思います。

2. 生命を視点に置いた改革

2.1 意識改革と生命

社会変革のための要素は、技術変革、社会構造変革、そして意識改革の三つと理解しております。「生命」視点での変革は意識改革の中に包含されるものであり、社会変革の中で最も重要な要素は意識改革だと言っても過言ではないと認識しております。私達は、“何のために生きるのか”、“生きる意味は”、“生きる価値”は、この問い掛けに対して心を開いた時、初めて真の改革を実現する環境が創出するのではないのでしょうか。私は、こう思います。『すべての社会的事象の根源には共通テーマとしての「生命」が存在すると。だからこそ、緒事象を単一の各論として論じるのではなく、「生命」が根源にあるとすれば、全ての社会的事象が「生命」を通して繋がっていることを意識し、取り組むことが重要だ』と。又、『全ての社会的事象は「生命」への思いを持ちつつ論じられるべきで、言い換えれば、「生命」の延長線上に全ての社会的事象を置くべきだ』と。私は常に、『「生命」とは何か？』、『自分自身は何のために生きているのか？』、『生きる上での価値は？』、等々の自己への問い掛け、

或いは、目に見えぬ世界への問い掛けを続けて参りました。ここ 10 年間の間に、企業に在籍し、社会貢献活動の一環として自ら立ち上げた、教育機関で行う「命の授業」を展開する中で、その答えが臆気ながらも見えて参りました。このことに関しては、次の、＜命の授業＞及び、＜生命とは＞の項で記述させていただきます。以下の図 2. 意識改革と“生命”に、以上の思いを表現させていただきました。

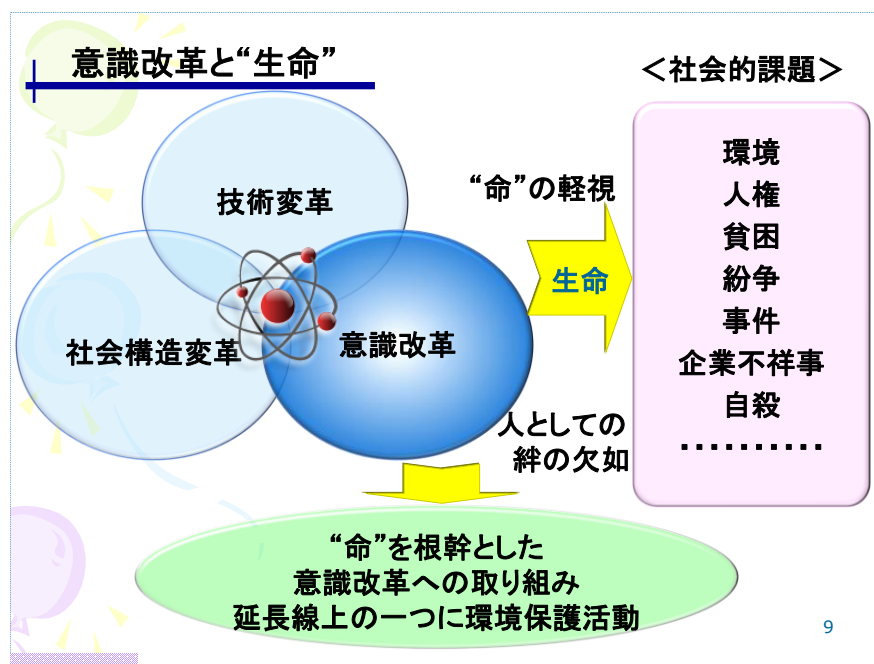


図 2. 意識革命と“生命”

3. 「命の授業」

3.1 社会的背景と「命の授業」

上述致しました諸活動の中で、社会変革を実現するための一つの視点、取り組みとして、子ども達と直接的な触れ合いの場の創出が重要な鍵となることを気付かせて頂きました。約 10 年前に企業に在籍しつつ、「命」を守る為の諸活動を通して培った、「生命」への強い思いが、社会貢献の一環としての「命の授業」を立ち上げる事となりました。この活動は、子ども達の身の回りに起こる様々な事象に対して、子ども達に「生命」の視点で触れて頂き、緒事象の本質的な意味を追求できる気づきと洞察力を持って頂くこと、更に、そこからの気づきを実践に結び付ける意識をもって頂くこと、その結果、利他的精神を持って頂く中で、社会をより良い方向に変革することを実践する存在となって頂くことを目的としております。

純粋な「生命」を頂いて生まれてきた子供たちが、様々な環境の中で、様々な出来事に触れ、成長するに従い、それぞれの自己形成をして行きます。又、子ども達は大人、そして社会を見て成長して行きます。日本の年間自殺者は 21,897 人（出展：平成 29 年度自殺対策白

書：厚生労働省）。その内、24歳までの若者の自殺者数は1,588人（出展：平成29年度自殺対策白書：厚生労働省）。又、いじめは323,808件（小、中、高、特別支援学校）（出展：『出展：平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」（速報値）：文部科学省』）であることが報告されております。更に、不登校の生徒は、182,977名（小、中、高）（出展：『平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」（速報値）：文部科学省』）であることが報告されております。

本来、生き抜く力を持っている子ども達が、様々な社会的要因を受け、様々な困苦に出会って行きます。個々の力だけでは対応困難な、こうした社会的悪循環を断つために、子ども達の世界へ働きかけることが重要だと判断し、直接子ども達と触れ合う場を創出する事を目的とし、教育機関に出向き、「命の授業」の取り組みを始めました。

3.2 「命の授業」、三つの視点

「命の授業」は三つの視点を前提に置いております。以下の図、3パラダイムシフトの実現をご覧ください。

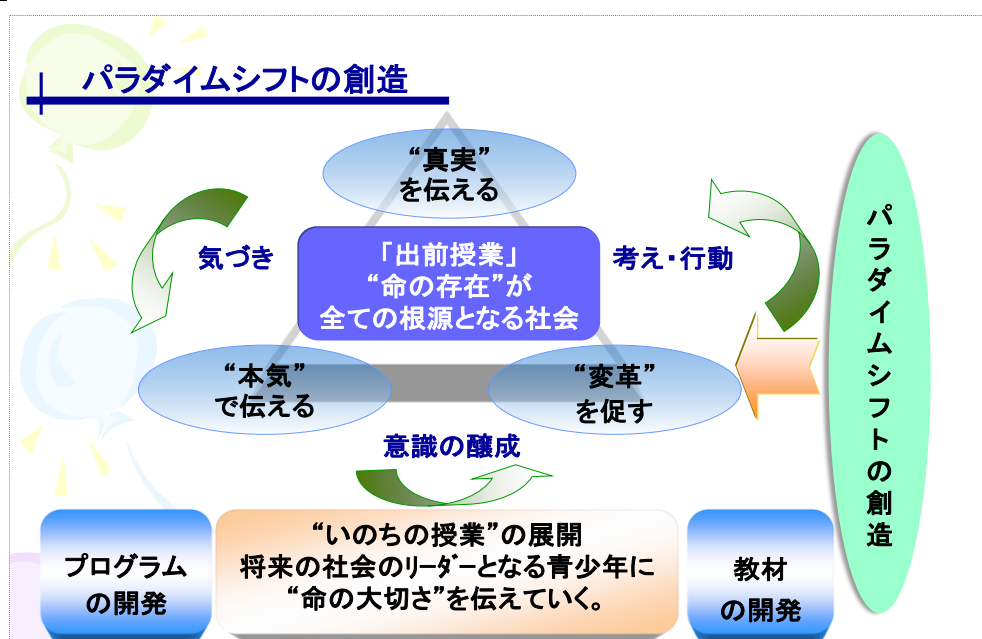


図3. パラダイムシフトの実現

一つ目は、子ども達に真実に触れて頂くことを念頭に置いております。触れて頂く事項に関しましては、私自身が多視点で調査・理解した上で、曖昧さが無い様に説明することを心掛けております。曖昧さを抱えたまま説明した場合には、こちらの心の在り方を簡単に子ども達から見抜かれてしまい、そっぽを向いてしまう経験を初期段階では幾度となくして参りました。想像を超える程の、相手の心を見抜く子ども達の力に気付かせて頂きました。

二つ目は、気づきを与えるということです。教えたことは知識として記憶されますが、知識の範囲を超えるものとはなりません。一方、自らの気づきによって触れたことに関しては、知識が知恵に変容して参ります。知恵は知識のように時が経つうちに朧気になってしまう

ようなものではありません。心の中に住み続けて行くものであります。そればかりか、様々な出来事を通して、膨らみ続けるものです。

三つめは” 変革” を促すと言うことです。気づきから得た知恵は、人の心を動かし、行動を起こす力の源になります。これに依って、子ども達の心の中に行動を起こす意識環境が創出されて参ります。行動を起こす心の変化を、子ども達が自ら気づく環境を提供する事であります。して、感動的な話を伝えて終わってしまうものではありません。

以上のプロセスを「命の授業」の中で展開することで、子ども達が今まで意識していなかった「生命」の本質に触れて頂き、「生命」の視点で社会をより良い方向に改革する行動を起こす、正にパラダイムシフトの実現を図ろうとする思いを「命の授業」に込めております。

3.3 「命の授業」概要

次に、「命の授業」の概要を以下の、図 4. 「命の授業」概要に示します。

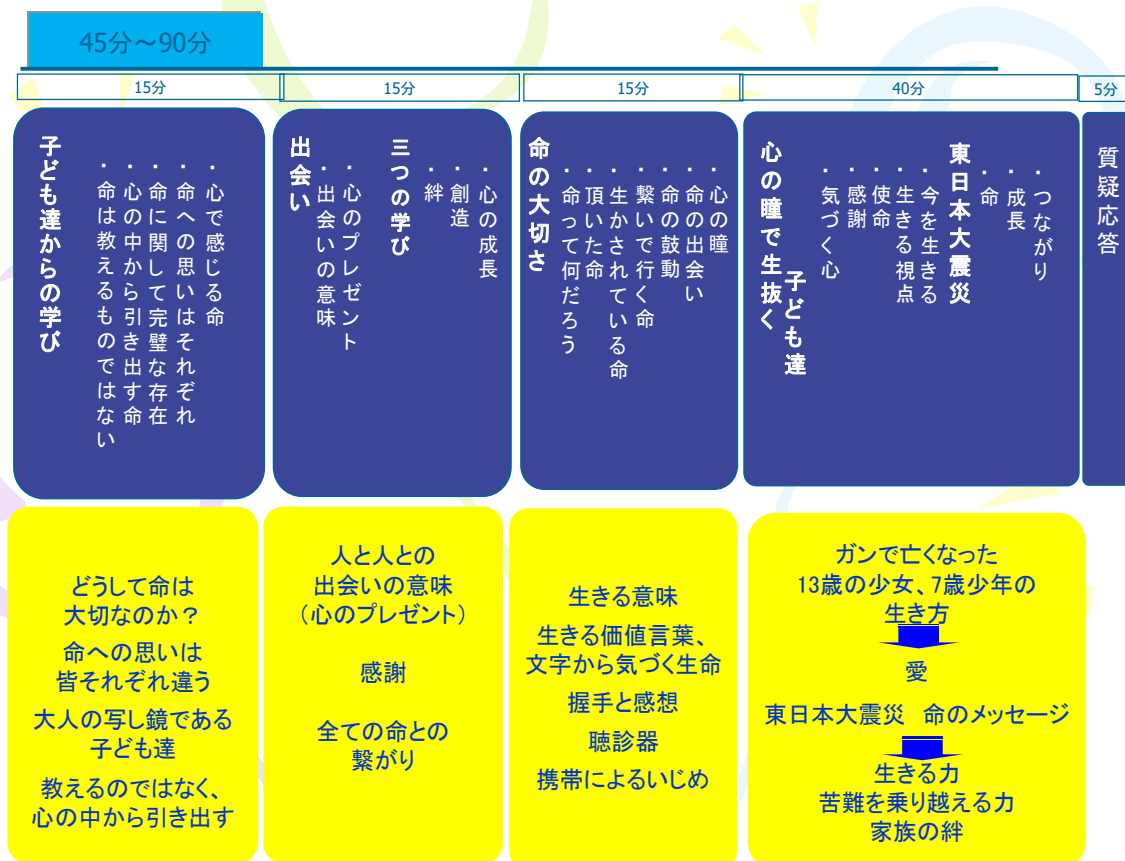


図 4. 「命の授業」概要

「命の授業」は“子ども達からの学び”ら始まります。これは、私が「命の授業」を始めて数年後に、子ども達から気付かせて頂いた事項についての語りです。この事項につきましては、後述する＜子ども達からの学び＞で詳述致します。概要は、①子ども達は生命に

関しては完璧な存在。②子ども達の生命への思いはそれぞれである。③生命は教えるものではない、又、理解させ様とするものでもない。④子ども達に伝えるのではなく、心の中から生命への思いを引き出す授業が真の「命の授業」。従って、「命の授業」は講演の形式ではなく、子ども達との対話を核とした気づきの場となります。

次に、出会いと言う事に関して子ども達と対話をして行きます。人生の全ては様々な人との出会いが羅針盤となります。出会いの時、私たちは心のプレゼントを交換するのです。心のプレゼントは、“優しさであり、労りであり、感謝であり、思いやりであり、そして、命の力”であります。続けて、三つの学びについての対話です。「絆」は文字通りの意味であり、特に家族の絆に触れます。「創造」は命の創造であり、命を繋いで下さった数えきれないほどの方々への思いを馳せる場面を設定します。そして、「心の成長」は全ての命との繋がりで、人間を最上位に置いた命の構造ではなく、全ての命が同じテーブルに乗ることの重要性に関する対話となります。

次が、「命の大切さ」です。私たちは何のために生きるのか、生きる価値とは何か、又、文化的事象が気付かせてくれる「命の思い」、握手する事で感じる命、聴診器で聴く鼓動、いじめに使用される事もあるIT機器の適正使用について、等々、「生命」の意義に気付くための場を提供します。

最後に行うのは、心の瞳を持った子ども達の紹介を通した、「生命」への触れ合いです。ガンで亡くなった13歳の少女、そして同じくガンで亡くなった7歳の少年の生き方について、それぞれが残した「命のメッセージ」を通じて触れて頂く事で、「生命」の意義に気付く心の醸成を行って行きます。その気付きは、生きる事への感謝、使命を持った生き方、今を生きる、そして“愛”に向かうものです。又、東日本大震災に直面し、その体験から得た思いを「生命の思い」として発現された、多くの子供たちの「生命のメッセージ」に触れて頂き、人の心の在り方、生きる力、家族の絆、等々に気付く場を提供します。

以上が「命の授業」の概要です。(13歳の少女の生き方について、詳細を後述致します。)

「命の授業」は講演ではありません。「生命」を教え、伝え、理解させるものではなく、子ども達と対話し、子ども達の心の中に既に内在している「生命」への思いを引き出して行く事で、「生命」の意義、自己創造、自己実現への気付きをもって頂く場となっております。

3.4 「命の授業」、実践初期の出来事

「命の授業」の立ち上げ当初はすべて手探りの状態であり、予想していなかった様々な出来事に触れ合うこととなりました。活動を始めた当初、ある小学校の先生から「命の授業」に対して、以下のご示唆を頂きました。『私は、重度障害を持つクラスを担当する小学校の教師です。その視点から意見を言わせて頂くと、一般企業人、法人が「生命」について子供さんに語るのは非常に安易なことと思う』と。私は、この意見を心からお受け止めした上で、次のような思いを述べさせていただきます。「生命」とは何かと言うことです。「生命」は、全ての生きる存在が保有しているもの、そして存在そのものです。勿論、人生の中で比類の無いご経験を積んだ方の語りは、多くの人に、より多くの気づきと感動を伝えることは誰でもが受け止めるところです。ご自身が重度の病を持ちながら多くの子供さんと接しながら、数え

切れないほどの気づきと感動をお与えなさった方々が居られたこと、そして今でも居られることは十二分に承知致しております。ご活動には想像を絶するご苦勞があり、子どもさん方の心に与えるものはとてつもなく大きいものがあることも理解致しております。

私自身、複数の特別支援学校、養護学校での「命の授業」を実践しており、よく理解しているところです。先生が御示唆された「安易」と言うことは、企業人の一人として、又、現在は NPO 法人に在籍する一人として、生命を語る価値を持った存在に相応しいかどうかを問われているものと推察致します。

私は、企業人或いは NPO 法人に在籍している人が「生命」の本質、或いは「生命」を語るに相応しくない存在で在るという認識にはございません。何故ならば、「生命」はすべての存在が有するものであり、すべての存在が、「生命」そのものであるからです。端的な表現ではありますが、「生命」を有する存在であれば、誰でもが「生命」を語るができるものであるということです。与える感動の程度についての議論はございますが、このことが、子どもさん方に語ることが安易であるということには結びつかないことと受け止めさせて頂いております。

「生命」を尊重し、「生命」の大切さを受け止め、「生命」の存在が全ての社会的事象の根源であることに大きな気づきを持った時、それが企業人であろうと、NPO 法人であろうと、又個人であろうと、「生命」を語る上で、なんら不都合なことは無いことを私は心から信じております。私の体験から敢えて言うならば、幼稚園生が語る「生命」への思いの中にも、大人を含め、多くの人達が傾聴すべき価値あるものが内在すると理解しております。実際、幼稚園で「命の授業」を行いますと、大人が表現できない様な心を揺さぶられる多くの言葉に触れることが少なくありません。『「生命」は何だと思いますか?』と問いかけると、『「生命」は心』、『「生命」はたった一つの大切なもの』、『お母さんから頂いた大切なもの』等々の答えが幼稚園生から返ってくるのです。このような体験を通して私は、生命を語るテーブルは、語る人の実体験だけで枠組まれるものではなく、生命を思う全ての人に開かれているものであることを強く感じるのです。

又、取り組みを始めた当初、一部の先生方から、「子どもには分からないだろうから、又、質問しても答えられないだろうから、「生命」の話はやめて頂きたい」と言われることがありました。「命の授業」は教える授業ではありません。子ども達の心の中から「生命」への思いを引き出す授業であります。ある小学校で一年生の児童に授業を行った時のことです。授業が終わるとひとりの男の子が私に『僕は生きる意味が分かった』と言ってくれた。理由も、『生きることは本気で生きること』だと。又、ある学校の三年生が、私が話し始めた途端に、『質問があります』と手を挙げて来ました。『どうぞ話して下さい』とお話ししたところ、その生徒さんはこう話を続けました。『人は死ぬのでしょう』、『どうせ死ぬ人間がどうして生きる意味、生きる価値があるのですか?』と問いかけて来たのです。同じくして、もう一人の生徒さんが同様な質問をして来ました。小学校三年生です。低学年の生徒さんが、「生命」に関して既にこのような思いと感性を持っているのです。この体験を通じて私は大切な気づきを頂きました。子どもだから分からないのではなく、寧ろ子どもだからこそ思い、感じていることがあるのだということを。そして、大人の身勝手な価値観で、子

ども達の可能性に枠をはめてしまう事の重大さに気付かせて頂きました。

3.5 「命の授業」で紹介する少女の生き方

ここで、「命の授業」の中で、子ども達に触れて頂いている事例の一部をご紹介します。前述した、13歳の少女、猿渡瞳さんの生き方に触れます。

1991年、瞳さんはこの世に生を受けました。瞳の大変大きな元気な赤ちゃんでした。福岡県大牟田市で育った瞳さん。成長するに従い、兄弟の面倒を見ながら、母親を支える家族にとって力強い存在となって行きました。小学校6年生の時に母と遊んでいた際に右ひざを打ち、痛みを覚えました。病院で検査の結果、右大腿骨骨肉腫が発見され、医者から母親に、「余命半年」と宣告がされたのでした。この時、肺にも転移していることが分かりました。母親は大きな悲しみを抱えながらも気持ちを奮い立たせ、瞳さんに余命宣告の話をしました。大きなショックを受けて大粒の涙を流した後、それでも厳しい宣告を受け止めた瞳さんは母親に、『ママ、もう泣かないでママがガンじゃなくて、私がガンで本当に良かった』と言葉を発したのです。12歳の少女が、自分の余命が半年であることを宣告された状況で、悲しみに暮れる母親を気遣ったのです。この時の瞳さんは、恐らく、“感謝”、“許し”、そして“寛容”の気持ちが自然と心の中から溢れ出て来たのではないかと想像します。この時から中学2年生になるまで闘病生活をしながら病と闘ってきた瞳さん、2004年7月、中学2年生の時に大牟田市の弁論大会で、学校を代表して自身が書き上げた「命を見つめて」と言う作文を発表しました。

私は、ご家族、そして、この作文を出版した西日本新聞社様にご了解を頂き、「命の授業」の中で、生徒さんを含めた多くの方々に触れて頂く場を作って参りました。ご家族から伺った瞳さんの思いを、その作文に重ね合わせながらお伝えして来ました。その一部を以下ご紹介致します。13歳の少女が大牟田市の弁論大会で発表した、生きる意味、生きる価値、そして「生命」の意味を心から気付かせて頂くことが出来る、正に“魂の叫び”に触れて下さい。それは、この一文から始まります。

『みなさん、みなさんは本当の幸せって何だと思いますか。実は、幸せが私達の一番身近にある事を病気になったおかげで知る事が出来ました。それは、地位でも、名誉でも、お金でも無く、「今、生きている」と言う事なんです。(出展：瞳スーパーデラックス 西日本新聞社)』 如何でしょうか。瞳さんのこの思いは、現代人が遠くに置き忘れて来てしまった、“生きる意味”への心からの問い掛けではないでしょうか。

この後も、瞳さんが闘病生活で気付かれた様々な事柄について伝えられます。その中で、特に注目すべきところがあります。それは、『私達は生き続ける為に必死に闘ってきました。しかし、あまりにも現実 is 厳しくみんな一瞬にして亡くなっていかれ生き続けることがこれ程困難で、これ程偉大なものかという事を思い知らされました』(出展：瞳スーパーデラックス 西日本新聞社)』と言う下りです。お気づきでしょうか。瞳さんは、生きることに對して、異なった見方をしております。困難、そして偉大という見方です。

この視点には大きな意味が内在していると感じます。生きて行く上で多くの苦しみ、悲しみを体験することになるが、一方で、生きることは素晴らしい事だと気付くこと。言い換えれば、苦しみ、悲しみの中にも大切な思いに気づき、どの様な状況に置かれても、自分自身

の人生に生きる意味、生きる価値を見出して行く、正に“命の力”を持つことへの大きな示唆を瞳さんが私達に投げ掛けているのです。そして、瞳さんは、結びのところで、この様に続けます。

『みなさん、私達人間はいつどうなるかなんて誰にも分らないんです。だからこそ、一日一日がとても大切なんです。病気になったおかげで生きていく上で一番大切な事を知る事が出来ました。今では心から病気に感謝しています。私は自分の使命を果たす為、亡くなったみんなの分まで精一杯生きていきます。みなさんも、今生きている事に感謝して悔いのない人生を送って下さい。(出展：瞳スーパーデラックス 西日本新聞社)』と。如何でしょうか。13歳の少女が、重い病を患ったことで、生きる上での意味、価値に気付いているのです。そればかりか、自分の命を奪うかもしれないガンという病気に感謝しているのです。正に“魂の叫び”です。どの様な状況に置かれても使命感を持って生きる事に気付かせてくれた、病への感謝の気持ちでした。瞳さんの生き方に触れた子ども達からは、『自分が、もしガンになったら、瞳さんのような生き方はできないかもしれない。どうして自分だけがガンになってしまったのか、恐怖と恨みの気持ちを持つと思います。ましてや、感謝と言う思いは芽生えないと思う。』と記しながら、『だけど、瞳さんの生き方に少しでも近づけたらいいと思う』と綴った手紙が数多く届いております。瞳さんのこの思いを同年代の子ども達に広く持つて頂くことで、世の中を大きく改革する「命の環境」が醸成されて行くのではないのでしょうか。

前述致しました様に、全ての子ども達は、「生命」に関しては完璧な存在です。子ども達の心の中に内在している「生命」への思いを引き出す場を、私たち大人が全身全霊を掛けて子ども達に提供して行く行動を起こさなければなりません。私は「命の受業」の中で、瞳さんの生き方を子ども達に紹介することで、子ども達の心の中に元々内在する「生命」への思いを引き出そうとしているのです。

ガンを患いながらも、自筆の作文「命を見つめて」を発表した瞳さんは、この発表の2か月後の2004年9月16日にその生命を閉じられました。弁論大会で発表した時には既に全身にガンが転移していたのです。その体で、正に全身全霊を掛けて世の中の人達に向かって生きる意味、生きる価値、生命の大切さを“言霊”として発表したのです。最後まで、世の中の人々の為に生命を輝かせ続けたのです。この生き方に私たち大人も多くを気づき、学ばなければなりません。瞳さんが世の中の人達に伝えようとした数々の思い、それは、感謝の心であり、使命感であり、生きる力であり、視点の持ち方であり、絆であり、利他の心であり、そして慈愛であり、正に無条件で無制限の愛でありました。

瞳さんのお母様からこんな話を聞かせて頂きました。

『瞳は、自分の身体を看護師さんに拭いてもらう時に、普通だったら、恥ずかしさで一杯になるのに、「私は幸せ」と笑顔で言ったのです』又、『私と同じ生き方を、どの人もできる力を持っていることを伝えてほしい』と、お母さんに伝えたのです。そして、亡くなる間際に、『世界を変えてほしい。これがお母さんへの宿題』と、お母さんに世界を変えることを託したのです。私は、瞳さんとの奇跡の出会いを頂き、そして、瞳さんの持っている「生命」への思いを通じて、生きる意味を今一度見直す機会を頂いたのです。瞳さんのこの「生命」の

輝きを世の中の多くの子ども達に触れて頂き、子ども達がどのような環境で育ったにせよ、自分自身の存在意義を改めて見直して頂き、自ら社会を改革する社会環境が醸成される事を願って止みません。

4. 子ども達からの学び

4.1 命を語る子ども達

「命の授業」を実践する中で、私自身が子ども達から気付かせて頂いた多くの宝物があります。その中の幾つかをご紹介します。

その一つは、

“子ども達は、「生命」に関しては完璧な存在である” ということです。

子ども達に、『「生命」とは何だと思いますか？』と質問したところ、次の様な回答が返って来ました。小学校一年生です。勿論、全ての一年生がこの様に答えるのではありませんが、全国の多くの一年生が答えた中の一部をご紹介します。

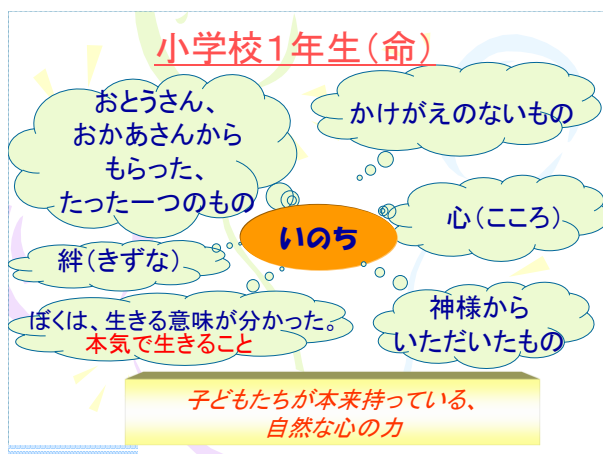


図. 5 小学校一年生からの回答

図. 5 小学校一年生からの回答に示す様に、私たち大人が想像出来ない程の、「生命」への強い思いを既に持っていると言う事実です。当初、この質問を子ども達に投げ掛け、その答えを聞いた時の私の驚きは、今でも鮮明に私の心の中に残っております。

次に小学校二年生の「生命」への思いをご覧下さい。図. 6 小学校二年生からの回答で見られる様に、「生命」の本質的な姿を驚く程の言葉で、表現して来るのです。この体験を通じて、私は確信したのです。それは、「子ども達は産まれた時から既に、命」「生への完璧と言える程の感性を有している」という事です。幼い子ども達がこの様な感性を有していない存在と、私たち大人は捉えております。それが自然な思いかも知れません。しかし、実際子ども達が示してくれた、正に「生命の力」は、私の子ども達への視点を劇的に変えるものでありました。更に確信したこ



図. 6 小学校二年生からの回答

とは、「生命」への思いは、子ども達それぞれ皆違うと言う事であります。「生命」が大切と言う思いは共通であります、上述した様に、「生命」の捉え方には、それぞれなりの大切な心の思いがあるのです。

この事から、「生命」への思いは一律ではなく、一人ひとりが、それぞれの思いを有しており、加えて、その思いには、「生命」の意味を見出す程の強いメッセージが入っていると言う事です。

4.2 「命の授業」への思い

上述した体験が、「命の授業」の在り方を大きく変えることとなりました。私自身、「命の授業」を立ち上げた当初は、「生命」の大切さを言葉で伝え様としておりました。その中で、授業を受けた思いを子ども達から手紙で頂くことをお願いしていたことで、子ども達からの多くの手紙に触れることが出来ておりました。その中で殆どの子ども達が、『「命の授業」を受けて、改めて生命の大切さが分かった』と、一律的に終始する思いを綴っておりました。この時、気づきを頂きました。それは、「生命」を教え、理解させようとする授業を行っていた事で、子ども達の心の中に、こちらの思いが入って行っていなかったと言う事です。

更に次の様な気づきを持つことが出来たのです。

子供たちが、生命に関しては完璧な存在である事を認め、子ども達の思いを受け止め、本気で向き合えば、必ず心の中からそれぞれの思いを自ら引き出してくれる。大切なのは子供たちの「生命」への思いを受け止めること、子ども達から引き出す場を提供すること、そして、「本気」で語ること。

だからこそ、この授業には型通りのマニュアルはありません。更に、子ども達と触れ合うたびに、子ども達からの気づきを授業の中に浸潤させることで、授業そのものが成長していく、正に“子ども達から学ぶ授業”、そういう次元で考えないと、子供たちの心の中に入って行く授業にはならないと認識させて頂きました。

この思いを、次の様に表現させて頂きます。私が10年間、全国延べ600校、7万人の子ども達、そして、4,000人を超える先生方との触れ合いの中で気付かせて頂いた宝物であります。

それは、

” 命は、
知識として教えるものではなく、
言葉で伝えるものでもなく、
そして、頭で理解させようとするものでもない “

ということであります。

これまで全国を廻り、如何に、「生命」を教えよう、伝えようとしている場に数多く触れて参りました。教える、伝える、そして理解させる事で創出されるのは知識であります。知識そのものは生きる上での大切な糧となることは間違いありません。触れ合う出来事の中で、知識を適用する事は多くあるかもしれません。しかし、通常は、知識が知識のまま、頭の中に保存されてしまう事の方が多いのではないのでしょうか。又、“感動”として子ども達

に伝えるという場もありますが、その“感動”が話し手の体験の範囲の中だけで行われるのであれば、その“感動”が心に入る子供たちは限定されて来るように思います。これは、先の図. 5 小学校一年生からの回答、及び図. 6 小学校二年生からの回答にお示したように、子ども達の命への思いはそれぞれが皆違うということにあります。この事を、命と向き合う時の基本的視点として、子ども達に語らなければならないと気づかせて頂いております。これに関して、私のところに届いている手紙として、『過去に聴講した「命の授業」で感動したが、やはりその方の体験した範囲を超えず、自分がもっと感じたいと思っていた域に入っていけなかった』という内容のものが、全国の子ども達から頂いております。

私は、子ども達との触れ合いの中で、以下のような、在り方について、人生を変える程の気づきを頂きました。それは、

“知識を知恵に変革すること。

知恵により創出された意識は行動を誘発する。

そして、その行動は、自己及び多くの人達を幸せにする “

という、新たな「生命」への思いです。

知識は道具です。そのままでは知識の価値は一定の範囲に留まります。知恵は、知識を含め人生で得た多くの糧を人の幸せのために活用としようとする心の在り方です。そして、知識が知恵に移行すると、人を幸せにする為に行動を起こす、利他の意識が創出されるのです。

4.3 心の中から引き出す授業

「生命」に関しては、一般的な講演の様に、一方的に教え、伝えるのではなく、子ども達の心の中から引き出す場を提供することで、子ども達は、心の中に内在する「生命」への思いに自ら気づいて行きます。教えられた、或いは理解させられた「生命」の意味は知識として記憶に残る形となり、それが記憶だけに、何時かは薄れて行きます。しかし、気づきによって創出された思いは、自らがそれぞれの心の中から引き出したものであるが故に、忘れることはありません。何故なら、潜在的に眠っている心の思いに気づくと同時に、自分自身が既に、「生命」への大切な思いを有している存在だと言う事に気付くからです。

過去、「生命」を一方的に伝えられる場に接して来た子ども達からは、次の様な思いが届いております。これは、子どもの達からの手紙です。その中から個人情報削除し、抜粋したものです。（学校側の了解を頂いております）

『今まで、幾つか「生命」の講演に触れてきましたが、押しつけの一方的な話であり、心が動かなかった』、『今回、いのちの授業と言う事で、又、いつもの様な押し付けの講演だと思っていた。実際、受講するとそうではなく、自分たちの思いを尊重し、引き出してくれる場で在ったので、前向きに聞くことが出来ました』、『今まで受けて来た様な講演を想像していました。今までのような講演であれば、すぐ眠たくなってしまいが、今回は、最後まで、眠らずに聞くことが出来ました』等々の手紙を、全国の子ども達から頂いております。

私は思います。

「生命」への思いを、自ら心の中から引き出すことが出来る場を提供することで、

“真の自己に気づき、意識が醸成され、そして行動に移して行く”、

このプロセスが循環され、継続して行くことで、「生命」の本質に近付いて行くのです。

5. 子ども達の変化（行動を起こした子ども達）

5.1 子ども達の劇的な変化

子ども達が劇的に変化した神奈川県の一の小学校を紹介致します。

（学校長から了解を頂いております）

「命の授業」を開始した4年後、数年に渡り継続して授業を行った神奈川県の一の小学校の子ども達が、「生命」への意識が醸成されたことから、劇的な行動を起こしました。この学校では、当初から学校活動の全ての根幹に、「生命」を置いて下さいました。教育活動の全ての根幹に「生命」を置くことで、子ども達が、そして先生方の意識が大きく変容したのです。国内最大級の環境展示会「エコプロダクツ」へ、国内の一の小学校として先んじて出展を果たし、又、毎年出店を継続しているのです。会場では小学校1年～6年生までの児童たちが、通り掛かる来場者に向かって自分達が研究した成果を一対一で説明して行くのです。何とも感動的な姿です。

国内の一般的な学校は、子ども達の見学を目的として会場に来場します。しかし、この学校の子供達は主体側に立ち、来場者へ研究成果を発見して行くのです。

出展初年度には、環境省の上層部の方が駆け付け、又、次年度には国連から多くの方が視察に来られました。学校のブースに来場された多くの方々が、図. 7 来場者の感想にある様に、心を動かされた感動を伝えて来られました。そして、この体験が子ども達を大きく成長させたのです。

子ども達の本気で語る姿を見て、

- ・会社の上司に絶対見ておいた方がよいと言われた。
- ・頭をハンマーで殴られたような衝撃を受けました
- ・私たちが考えなければならないことを小学生が考えている。
- ・涙が止まりません。いつまでもここにいたいです。
- ・素晴らしい取り組み、自分の子供を通わせたい。
- ・これこそが持続発展教育の実践です。

子ども達は気づきました。

「生命」の大切さをしっかり

捉えた、その延長線上に

“環境、人権、貧困、平和、

等々の様々な課題を捉えて行く

ことで、本気で様々な課題

に取り組む意識が醸成され、

実際に行動に移す心が芽生え

てくることを。

図. 7 来場者の感想

そして、“本気で語れば、大人にも聴いてもらえるのだ”と、その結果、“子どもでも、大人の心を動かすことができるのだ”と、そして、“これが社会を変えて行くということなのだ！！”と。この小学校は今でもエコプロダクツに出展し続けており、多くの来場者が子ども達の持つ「生命」の力に触れ続けているのです。今も全国から一目置かれる存在となっております。

5.2 学校長から頂いたメッセージ

この小学校を大きく変遷させた学校長からの思いをご紹介します。私が10年間、命の授業を行い、延べ600校の校長先生とお会いした中でも、最も多くを学ばせて頂いた学校長の一人です。その学校長から、命の授業へのメッセージを頂きました。私が、企業に在籍していた時に頂いたものです。ご覧下さい。（学校長から了解を頂いております）

『本校で行っている「命の授業」は、予定調和的な体験と説話にとどまることなく、多角的な知識と複合的な視点に基づいた「命の教育」です。命にこだわり、学び、生きることによって様々な角度から切り込む画期的な授業だと感じています。若尾さんには、我々教師の願いや、子ども達の想い、そして若尾さんが伝えたい内容を丁寧にすり合わせていただき、常に新鮮な授業を実施していただいています。さらに、単発な授業に終わらず、年間を通して取り組むための多くの気づきも与えてくれます。年間を通して関わっていただくことで、他に類を見ない企業と学校との協同授業になっていると感じています。当校では、この「命の授業」を全学年の教育課程に位置づけ、年間を通して命をベースにした教育活動として実施しています。

「命の授業」をきっかけに、確実に子供たちは変わってきました。命のつながりを意識し始めた子ども達と教師は、今まで以上に気づきを得ています。命のつながりへの気づきは、現在の複雑化している課題にも立ち向かえる「つながりに対する気づき」を培い、課題解決にエネルギーを醸成することでしょう。今後は、若尾さんに頼る割合を減らし、いきながら、教師がより主体的に「命の授業」をコアにしたESD（持続発展教育）にチャレンジしていけるよう学校体制を整備していきたいと思います。』

（平成29年1月20現在）

子ども達の成長を本気で考え、子ども達との心の絆を重んじ、その為に、「命の授業」を取り入れて下さった学校長の存在が、学校を変え、先生方を変え、そして、子ども達を変えて行ったのです。そして、私自身の人生も、より豊かにさせて頂けたのです。

6. 「命の授業」への感想

6.1 子ども達と担任からの手紙

「命の授業」に触れて頂いた延べ7万人の子ども達の中で、4万人を超える子ども達から手紙を頂いております。学校からの了解を頂いた幾つかの手紙をご紹介します。個人情報情報は伏せ、手紙の中身を抜粋して記載致します。これらは、見方を変えますと、多くが、子ども達からの叫びとなって表現されたものと受け止めることが出来る様に思います。それではご覧下さい。（手紙の抜粋となりますが、掲載に関しては個人情報を伏せる条件で、学校側から了解を頂いております。）

<小学生>

「命の授業」を受けて、この世界を変えていきたいと思った。小さくても、大きくても、汚くても、綺麗でも、一つ一つの命がもっているその光景を輝かせていきたい。これから先、生きていく上で大きな支えとなるものを頂いて、感謝しています。この思い出を胸にしまって一步一步前に進んでいきます。

<小学生>

昨日は「命の授業」をして頂きありがとうございました。僕は昨日、自殺しようかと考えていました。なぜかという、いじめです。でも、「命の授業」のおかげで自殺はやめました。死んだら家族や沢山の人が悲しむから。先生は僕の恩人です。本当にありがとうございます。感謝しています。

<中学生>

「命の授業」を受けて、今、私がこうして生きていることに感謝して、悔いのない人生を送っていききたい。どんなに辛いこと悲しいことが起きても、自分には命があるから、ありがたみをもって生きていきます。こんな大切なことに気づかせていただいて、本当にありがとうございました。感謝の気持ちでいっぱいです。

<中学生>

「命の授業」を受けて、普段考えることのない命について考えさせられました。これからは本気で生きていこうと思いました。命は一つしかないものでとても大切なものです。これから私は、命を落とす人が少なくなるように、いじめや差別の問題などがあれば、積極的に止めていきたいです。そして、教えてもらったことをいろいろな人に伝えていきたいです。

<高校生>

自分は少しのことで落ち込んだり、つらい気持ちになることがあります。でも今日の「命の授業」を受けて、自分の悩みがすごく小さくて、情けないと思いました。生きていくことがあたり前ではないことをしっかりと、覚えておきたいです。

<高校生>

この世に私という存在は一つしかない。命は一度だけと自分が生きている価値の大きさが分かりました。私も本気で生きていこうと思います。この世に小さな命を授けてくれた親に感謝の意気持ちを忘れず、本当は、生きたかった人の分まで全力で生きていきます。

更に、ご担任の思いにも触れて下さい。

<担任>

「命の授業」を通して、田んぼと環境、日本の伝統とのつながりについて子ども達が考えられるようになりました。「命の授業」は先生の実体験に基づいた話だったので、子ども達たちが関心をもって話を聞くことができ、総合学習に対する子供たちの意欲が高まりました。

<担任>

「命の授業」は、いつも子ども達の転機となっていました。それは、学習を始めるきっかけ、学習に対する自信がなくなっていたときの意欲づけ、新しい視点の発見でした。いつも、一緒にいる担任だけでなく、先生に教えて頂くことや認めて頂くことで、子供たちは学習に対する意欲をもったり、自信をつけたりしていく様子がありました。

如何でしょうか。4万人を超える子ども達、そして、ご担任の先生方からの手紙のごく一部をご紹介致しました。子ども達が既に有している大切な心の思いを、自ら引き出す場を提供することで、多くの事に気付き始めます。そしてその気付きは、前を向いた実践として変化して行きます。「生命」に対する思いは子ども達が既に有していること、それも大人が感じる事が出来ないほどの感性で、「生命」への完璧な知恵を有していること。この事への受容と認識と理解が子ども達と心の触れ合いを持つことが出来る大きな要素と言えるでしょう。

6.2 命を喚起する授業

子ども達の真の姿は、「生命」として完璧な存在です。ただ、「生命」として完璧な存在としての自己を、様々な生活の中での葛藤を通して忘れていただけなのです。この事は、実は全ての人に共通する正に真理そのものなのです。その意味では、幼少の時から、「生命」に触れさせ、自らの心の中から既に有している大切な心の思いを引き出す場が必要なのです。

今まで、全国延べ約600校で授業を行ってきた体験上、教育現場での道徳授業の姿の中に、本の読み合わせであったり、「人権」の言葉の定義の説明であったり、「人権」は大切、だから、「生命」も大切といった言葉の上での教え込む説明を多く見て参りました。少なくとも、私の体験上、教え込むやり方では、どのような感動的な話をしたとしても、一方向的な話では、子ども達の心の中奥深く入って行かないことを認識しております。その理由の一つが前述した子ども達の手紙で推し量れるのです。繰り返しますが、

“『今まで、幾つか「生命」の講演に触れてきましたが、押しつけの一方的な話であり、心が動かなかった』、『今回、命の授業と言う事で、又、いつもの様な押し付けの講演だと思っていた。実際、受講するとそうではなく、自分たちの思いを尊重し、引き出してくれる場で在ったので、前向きに聞くことが出来ました』”という手紙が全国から数多く届いております。

私の体験上、「生命」の大切さを伝え、学ばせ様とする環境下では、子ども達の気づきを喚起出来ないことを気付かせて頂いております。伝えようとする側の誠意をもって行う行為であっても、この事に気付いた上での行為でなければ、自己満足で終わってしまう事になりかねません。「生命」は大切だと言う事は共有されておりますが、子ども達の「生命」への思い、例えば、何故、大切なのか？はそれぞれ違うのです。更に、子ども達は「生命」に関しては、完璧な存在だと言う事を忘れてはいけない様に思います。

7. 生命とは

7.1 生命の本質を考える

前述致しました様に、多くの苦しみを抱えた社員との触れ合い、ご本人の「生命」と、そして家族の生活を守る活動を通して、又、子ども達への「命の授業」を通して、触れ合いを持たせて頂きました多くの方々から、上述した様に、新たな気づきを数多く頂きました。ここでは、最も印象的な気づきについて思いを綴らせて頂きます。それは、「生命」であります。今まで思い続けて参りました、“「生命」とは？”に私なりの答えを見出すことが出来たのです。

それは、

“生命とは : 自己創造を体現化する継続的プロセス”

であります。

「生命」の存在意義への問い掛けは、「私たちは何の為に存在するか？」への問い掛けと同義語でありますでしょう。「生命」がプロセスである以上、目には見えません。つまり「生命」は行為であり、意識であり、存在そのものであるからです。私達の身体は、「生命」を構成する重要な要素だということは勿論ですが、しかし、「生命」の本質は目には見えない処にある様に思います。そして、「生命」は奇跡的な意味と意義を内在しているように思います。私は、目に見えない「生命」の存在意義は“魂の成長”と捉えさせて頂いております。又、魂の本来の姿は、“無条件で無制限の愛”と言う存在であることに気付かせて頂きました。

46億年前に地球が誕生し、生命は38億年前に誕生したと言われています。海の中で生まれた生命は、長い期間をかけて、或いは宇宙規模での時間にして、ほんの一瞬で、種を増やし、生命機能を進化させて参りました。私たち人類は、その中で、自己創造力と物事を認識する意識を持つという意味で、個性ある種として、そして地球上の2,000万~3,000万と言われる種に意識を持った働きかけが出来る存在として進化して参りました。一方で、数多くの「生命」から恵みを頂き、生かされている存在でもあります。

この様な、「生命」が存在する環境下に在って、私が常に関心を持ち続けていることがあります。

それは、

“何故、「生命」が存在するのか、何故この世に生まれて来るのか、どうして「生命」は引き継がれるのか、そして、何故、死があるのか“と言うことです。この私の「生命」への問いかけへの答えが朧気ではありますが、多くの教育関係者、7万人近い子ども達との触れ合いから、そして自分自身の心の中からの声を通して、霧が晴れる様に見えて参りました。前述した、“生命とは : 自己創造を体現化する継続的プロセス”の中に、その答えが包含されております。これは、あくまで、気づきであり、論理的な思考から生まれたものではないことを付け加えさせて頂きます。しかし、下記に記述する様々な出来事との触れ合いを

通じた気付きが、「生命」の意義を柔らかに紐解き、何とも言えない幸福感を感じさせてくれるのです。

先ず、私たちの真の姿は、目には見えない存在だと述べさせていただきます。それを別の言葉で言えば、“心”と呼ばれるものと捉えております。その意味では、身体も重要な「生命」の要素ではありますが、“心”を運ぶ車のような存在と言えるでしょう。私たちの頭が行為をコントロールしていると言われておりますが、ではコントロールしようとする力はどこから来るのでしょうか。

何故、人によって同じ事に対しても、コントロールの流れが違って来るのでしょうか。正に心の中から湧き出してくるような、優しさ、労り、思いやりなどの思いは、どこから来るのでしょうか。この様な見方をした時、頭脳を超える、目に見えない大きな力を感じざるを得ません。

私たちが「心」と呼ぶ存在について言えば、心の在り方が人によってそれぞれである事実に触れた時、論理的には説明出来ないものを感じます。目には見えないが、存在する。

「心」が思考に示唆し、その示唆を身体が受け止め行動が創出される。このプロセスが私たちの基本的行動様式となっている様に思うのです。そう感じるのです。

7.2 金子みすゞと命

114 年前にこの世に生を受け、「生命」への思いを心から発現し続けた詩人がいます。金子みすゞです。みすゞは、次のような詩を残しております。

「星とたんぼ」

“青いお空の底ふかく、
海の小石のそのように、
夜が来るまで沈んでる、
昼のお星は眼に見えぬ。

見えぬけれども あるんだよ、
見えぬものでも あるんだよ。 “

(出展：金子みすゞ童謡全集 JULA 出版局)

如何でしょうか。

目に見えないものに関しても大きな関心を寄せています。又、目に見えないものにこそ大きな存在価値が内在していることを示唆しております。今の社会では、前述した猿渡瞳さんが、作文「命を見つめて」で表現された様に、生きる目的が、“地位、名誉、金”という目に見える、且つ、享樂的な目的に向いてしまっているように思います。心が欠けてしまっているのです。益々貧しくなる心の在り方をみすゞも 100 年前に懸念し、後世に残す言葉で示唆したのではないのでしょうか。

「生命」の存在意義、価値、意味を説明するには目には見えない「心」への思いに触れた説明が必要になって来ているのではないのでしょうか。

前述しました、“生命とは：自己創造を体現化する継続的プロセス”に関して、再度触れてみたいと思います。私たちは生活する中で、様々な方々との出会いがあり、多くの方々との触れ合いを通じ、自分自身を振り返ることが出来る貴重な場を頂く事になります。自分だけでは気付けない多くの事柄に、出会いを通じて、言葉を変えれば、相対的な意味を持つ出会いを通じて気づくことが出来るのです。相手がいるからこそ、自身の存在意味、意義に気付いて行くことで、「生命」に関しては完璧な存在としての私たちに気付くことが出来るのです。気付きは知恵となり、行動を起こす力となります。完璧な自己を表現すること、正に体現すること、この事に相対的な世界で私たちが生きる意味を感じます。そして、このサイクルは継続し、より成長し続けるものであります。人として成長することの意味と重なるものです。

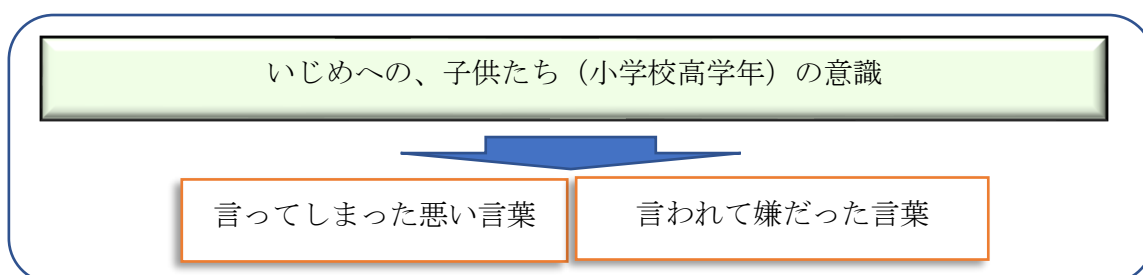
「心の在り方」は成長し続ける為の「生命」の意義を示唆する根源と思うと、目に見えない事の中にも生きる上での大きな幸せ感到れる事が出来るように思います。この幸せ感到れた時、金子みすゞの思いに、少しでも触れることが出来た様に思います。

8. 子ども達の価値観の変容と経済への影響

8.1 特別授業に見る子ども達の意識

青少年が起こす事件が続いている中で、そこ根源にある青少年の自己意識に触れることの必要性を感じ、ここ数か月の間に「特別授業」を構築し、複数の教育現場で実践を試みしました。この特別授業は、子ども達が自分自身の心の在り方にどのような気づきを持っているかに関する“自己認識”、そして、相手との人間関係について、何を感じているかに関する“対人関係性”について顕在化しようとしたものです。子ども達が自らの中から自己意識を引き出すよう、ホワイトボードに書き記す形を取りました。自己意識と対人関係性を見るため、一つの方法として、“言ってしまった悪い言葉”と、“言われて嫌だった言葉”を左右に分けて書くようにお願いしたものです。その一例について、下記の図. 8 「言ってしまった悪い言葉 言われて嫌だった言葉」その一、図. 9 「言ってしまった悪い言葉 言われて嫌だった言葉」その二、図. 10 「言ってしまった悪い言葉 言われて嫌だった言葉」その三をご覧ください。

*下記の写真、図7、図8、図9、の掲載につきましては、学校側から了解を頂いております。



如何でしょうか。子供たちが、グループに分かれ、全員が記した心の思いです。
“言ってしまった悪い言葉” に関しては、あまり書き記されていません。その反対に、
“言われて嫌だったと思う言葉” は、数多く記されています。この傾向は同じ教育現場
の多くのグループに共通したもので、実践を試みた他の全ての教育現場に於きましても、
同様な傾向がみられました。この結果を踏まえ、実施状況を考慮しつつ、以下、私なり
に考察を加えてみました。先ず、実践する中で、新たに検証された事象について、ショッ
キングな出来事として、以下、図. 11 ショッキングな出来事をご覧ください。

ショッキングな出来事 その一

子供たちは、談笑し、笑い声をあげ、楽しみながら、書き続けた。
* 同席した担任から、生徒に向かって、
『あなた方、どうして楽しみながら書いているの』と投げかけがあった。
(喜び、楽しさ、嬉しさ、そして、絆に対する価値観の変容)

ショッキングな出来事 その二

相手に対して言っている言葉を、悪いと思っていない状態が確認された。
* 先生に怒られるから、陰で言い合う。悪いという認識はない。
(労り、思いやり、気付きの心、等々の欠如)

ショッキングな出来事 その三

「相手から何を言われても気にならない」と言う、子ども達の存在。
* 実際、傷つく子供たちもいるが、本来なら、傷つく言葉も、ゲーム
感覚で楽しんで書く子供たちの多さ。
いじめられている自己認識からの逃避、或いは、本当に気にならない
(無関心、無視、開かない心、・・・)

ショッキングな出来事 その四

担任の教師が、子供たちの日常会話に全く気付いていない。
* 子ども達は、担任がいないところで、言い合っている実情はある。
生徒に向かって、担任から、『本当に毎日、こんなことを言ってるの?』
という、言葉が発せられた。

図. 11 ショッキングな出来事

この状況から、子ども達の差し迫った意識状態が見えて参ります。

大きく三つのことが見えて参ります。

一つは、自分自身が、いまどのような意識状況に置かれているかに気づいていないこと。いじめを誘発する言葉に関しても、いじめに繋がらないと思っているだけでなく、楽しむ感覚で捉えていること。いじめとして受け止められる言葉に関しても、楽しみながら書き記す感性。自分自身が他に対して発している言葉、或いは行為の持つ意味と重要性についての認識が大きく欠如している状況が見えて参りました。この心の状況から生み出される、「身勝手さ、暴言、いじめ、命と向き合わない心、・・・」等々、様々な意識状態、事象が想定されるように思います。

二つ目は、相手の心の状態を受け止める心の受容性に欠けていること。特別授業の中で、何人かの子ども達に、言われて嫌だった時の思いを語ってもらいました。実際、傷ついている子供たちがいる中で、その気持ちを押し量れない子ども達が数多くいるということが見えて参りました。相手の目を、顔を、そして行動様式をしっかりと見ること、相手の心の状態を、それなりに押し量ることが出来る筈です。その心の在り方を失っている状況に、私は驚きを隠せませんでした。実際に相手の目、顔、そして行動様式が見えていても、心の目で相手の心を感じることが出来なければ、相手を傷つけたり、自殺行為に繋げていたり、どのくらい危険な要素を含むか、深く考えられる思いが致しました。この心の状況から生み出される、「気づき、労り、共感の心の欠如、差別、暴言、・・・」等々、様々な意識状態、事象が想定されるように思います。

三つめは、相手に何を言われても気にならない子供たちの存在です。特別授業の実践を通して見えてきた事象。それは、言われて嫌な言葉で傷ついている子ども達が多くいることは間違いありませんが、一方で、その言葉を楽しみながら書く子供たちも数多くいるということです。特別授業を進める中で、子ども達が私に、「私は友達から何を言われても気にならないよ」と話してきたのです。そのような事象を起こす背景として、一つは、自分自身がいじめにあっている対象と、自分自身が思いたくない、また友達からも思われたくない、という、意識的逃避による自己正当化です。二つ目は、“本当に気にならない”という自己認識欠如が想定されます。何れにしても、意識が歪曲して行くことには間違いありません。この心の状況から生み出される、「無関心、無視、開かない心、・・・」等々、様々な意識状態、事象が想定されるように思います。

次に見えて参りましたのが、上記に記載した子供たちの言動に、先生方が気づいていなかったという事実です。更に、上記に記した子ども達の行動様式は、先生方がいない所で行われているという事実も浮かび上がって参りました。これは、子ども達が書き終わって、発表しあっている時に、先生方から、「あなた方、本当に毎日、こんなことを言ってるの？」という言葉が発せられることで分かったことです。これは、特別授業を行った全ての教育現場で見られた光景であります。その意味では、先生方に気づきの期待を持つことは相当程度、

無理があり、気づいていない事に対する非難も慎重を要するように思います。

今や、IT 機器も、教育現場でも、先生方が気づけない所で、いじめや、それに近い行為が子ども達の間で行われていることを、真剣に自覚していかなければならないと思うと共に、子ども達の心が傷つき、又、命を絶ってしまうかも知れない状態が、子ども達だけの世界で展開されていると言う状況を直視することの重要性を感じております。又、そこから学び得た事実を基に、何らかの対応を図って行くことの必要性についても強く感じております。元々、純粹で穢れのない、命に関しては完璧な存在として、この世に生まれて来た子ども達が、大人、そして、社会の影響を受け、本来の存在から掛け離れて行ってしまう現状を変えていかなければなりません。

8.2 心の傷ついた子ども達

次に、「命の授業」を受講した子ども達からの手紙を一部ご紹介致します。今まで、約4万人の子ども達から、手紙を頂いて来ております。その中で、気になる手紙も相当数頂いております。以下、私なりの私見ですが、命に対して心を開けない子ども達の手紙と受け止め、私なりの考察を付け加え紹介いたします
記載につきましては、学校側からご了解を頂いております。

<生徒 A>

私はこれまで、人権学習等、色々な話を聞いて、命の大切さ、尊さについて学ぶ機会がありましたが、その感想には、命の大切さについて改めて感じましたと、まあ、このくらいの事を書いておけばいいだろうと、自分は命の大切さなんて言われても、そんなことは分かっている。面倒だと思っていた。

<考察>

- ①命のことを分かっていると、思い込んでいる状況が見えた。「命は何故、尊いと思いますか？」の質問に答えられないのです。
- ② 命のことにに関して、「面倒」と捉えている背景には、命についてよく理解していないこと、そして、教えてもらいたい、それが一番手っ取り早いという、思いが見え隠れ致します。

<生徒 B>

今の世の中、医療が進歩して人の死が身近ではなくなっています。だから、高校生、中学生等に命とは何か？と、命の大切さを話しても一部の人達以外には心に、響かないと思います。実際、私の心にも響きませんでした。涙するぐらいの、どんなに感動的な話を聞いても、人権の話はつまらないと思っている人、話も聞かずただ眠る人、こういう人たちも少なからずいます。身近な死を体験していないため、命の大切さを想像できないのです。

<考察>

- ①人の死に、身近に体験しなければ命の大切さに触れることが出来ない、という

思いに、周りに起こる事象に、命の視点で心を開けない姿を垣間見ることが出来ます。又、自ら心を開こうとする姿勢の欠如、正に気づきの心の欠如を感じます。

②私たち人間は、自ら体験していない事象についても、そこから多くのことを想像し、学ぶ力を有しております。心を開けば、多くのことを、周りに事象から気づくことが出来ることを心から感じております。

＜生徒 C＞

抽象的な授業だった。いじめがなぜ生まれるのか、どこに問題があるか等、社会的問題を顕在化し、そこから議論すべき。

＜考察＞

①「唯心」、全ての事象は、自らの心から創出されることへの思いが大きく欠如していると感じます。顕在化した事象を検証し、是正処置を施行することは必要ですが、抜本的な解決にはなりません。心を変えない限り、周りの事象を変えることはできません。まず心の在り方の重要性に気づくことが、必要なのではないでしょうか。

②命は顕在化した事象にも内在しますが、目に見えない心の中にこそ内在するものです。論理的で目に見える答えをのみを求めるのではなく、心の中をのぞく意識への変容が必要と感じます。

＜生徒 D、E＞

- ・私は人間が嫌いで、今、生きていることが幸せだと思えず、生きていたくありません。
- ・僕は昨日まで、死のうかなと思っていました。いじめが原因です。でも、この授業を受けて、もし、死んだら、周りの人が悲しむことが分かったので、死ぬのを止めました。

＜考察＞

①命を絶とうと思っているという手紙を、全国の子供たちから数多く頂いております。命を絶とうとする、その原因は様々です。現在も「命の授業」を行う度に、教育現場から引き続き、命を絶とうとしている手紙が届きます。あまりに多くの子どもたちが、命を絶とうとしている状況に、大きな衝撃を受けております。

②学校側の了解を頂き、命を絶ちたいと思っている手紙を下さった生徒さん方と、面談をさせて頂きました。子ども達が異口同音に、『命を絶ちたいという思いは、親にも先生にも言っていない』と話すのです。最悪の状況が発生する前に、子ども達の心に寄り添い、気づく場、行が必要と、強く感じております。

8.3 子ども達の心が繋がる経済への影響

次に上記 5.8.2 の事項が経済活動にどのように影響するのかを以下、考察致しました。

図 12. 子ども達の意識が繋がる経済への影響考察をご覧ください。

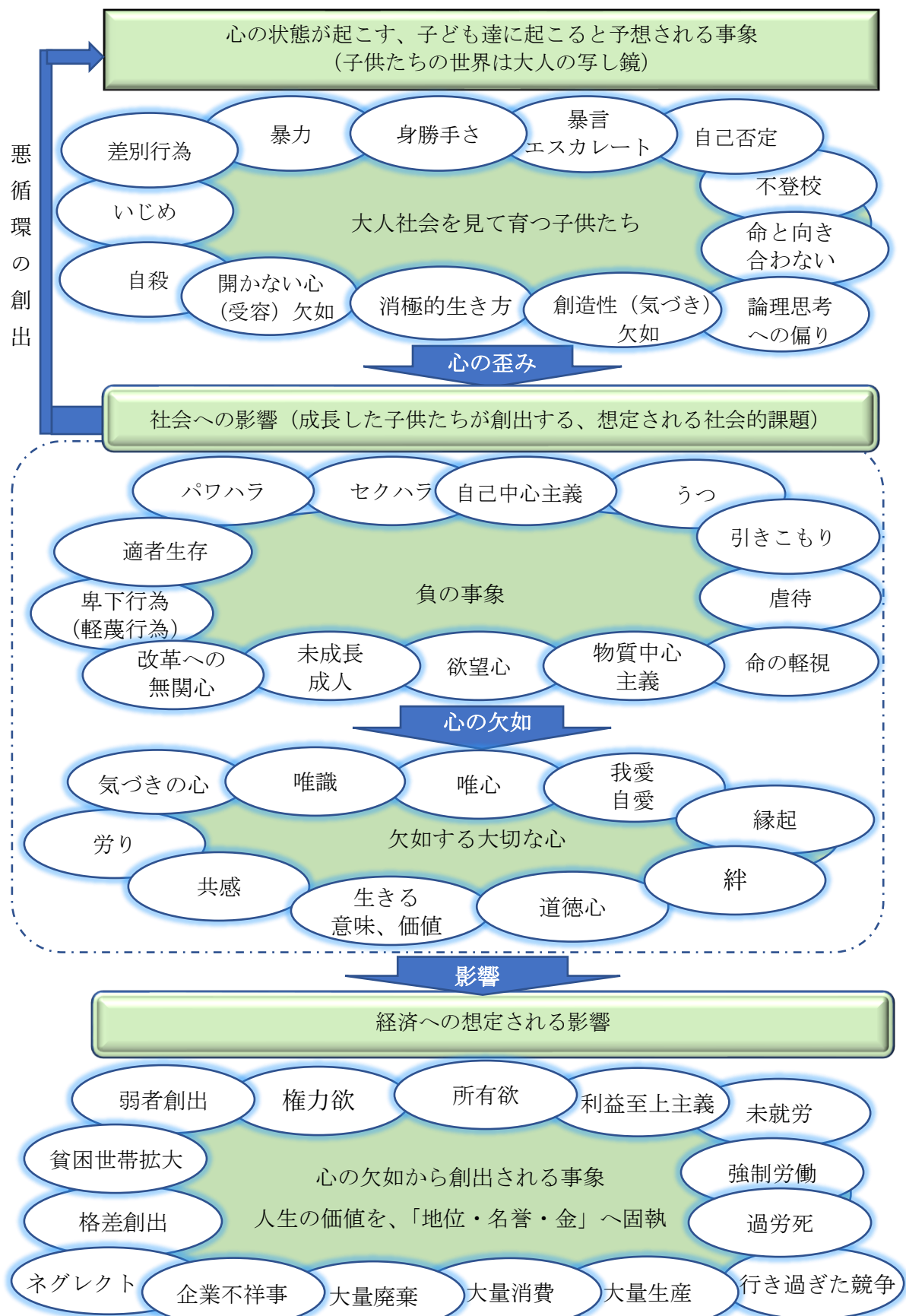


図 12. 子ども達の意識が繋がる経済への影響考察

図 12. 子ども達の意識が繋がる経済への影響考察は私の私見であり、想定されるであろう事象を記載致しました。「命の授業」、特別授業、子ども達の面談等々から見える子ども達の心の歪みは、「心の状態が起こす、子ども達に起こると予想される事象」に記載した事象です。この子供たちが心の歪みを有したまま成長し、社会活動を構成する一員として活動した時、社会に与えるであろう影響を、「社会への影響（成長した子供たちが創出する、想定される社会的課題）」に記載致しました。又、この心の歪みによって欠如して行くだらう心の在り方を同事項に補足致しました。更に、心の多くの要素を欠如した状態が経済に与えるであろう影響を、「経済への想定される影響」に記載致しました。持続可能な社会経済の実現には様々な社会制度、技術、医療、地球環境、等々が欠かせない要素であります。しかし、これらの要素を創出し、運用し、改善して行くのは私たち人間です。仏教にある、“全ての行為とその結果は心が作り出す”という意味の「唯心」、この思いを私たちは心に刻み、目に見える世界は目に見えない心が作り出していることを、今一度、振り返ってみることが大切なのではないのでしょうか。更に、子ども達の心の歪みは、周りの大人、そして社会全体が有している歪みそのものであり、子ども達の心は社会の写し鏡であります。私たちはこのことを心に深く刻み、社会そのものを変革し、持続可能な社会に成長させて行かなければならないことを強く感じると共に、社会の様々な事象と向き合い、心から変革を実践する存在の必要性を強く感じます。

以上のことは、特別授業を実践したことで、見えて来た実情から顕在化したものです。「命の授業」と共に、この特別授業は、子ども達と本気で向き合う場を創造すること、子ども達の本質は、純粋で無垢な存在であること、そして、純粋で、無垢な存在が身の回りの大人、又、社会に影響を与える立場の組織、個人の不祥事、或いは、不適切な行動・発言、等々により影響を受け、子ども達の心の在り方が変化したことを語り部が認識していること、これらのことを子ども達に受け止めて頂き、進めて行く授業であること。この事により、殆どの子ども達は心を開いてくれるのです。心を傷つける言葉を発している実情は、「**8.1 特別授業に見る子ども達の意識の事項**」で、触れて頂いた通りですが、心を傷つける言葉の件数は、恐らく全国レベルでは、天文学的な数になることは間違いありません。この実情を我々大人は、社会は謙虚に受け止めていかなければならないのではないのでしょうか。そして、子ども達のことを真に思うならば、子ども達が真に心を開いて頂くための場、手段、言葉、等々を子ども達の心と結び付けることが出来るような状況を創造して行くことを、我々大人は、社会は本気で自覚していくことが必要なのではないのでしょうか。繰り返しますが、子ども達の本質は純粋、無垢な存在です。この実情を歪めてしまっているのは、身の回りの大人であり、社会であります。子ども達の不適切な行為を咎める前に、大人、社会の在り方を問わなければいけないのです。このことが真に自覚され、変革がなされた時、初めて、いじめや、命を奪うような出来事が発生し続ける社会の悪循環が抹消されて行くのではないのでしょうか。

＜終わりに＞

約 10 年間、全国延べ約 600 校、7 万人を超える子ども達との直接的な触れ合い、4,000 人を超える多くの素晴らしい先生方との出会い、そして、40,000 人を超える子ども達からの手紙を通して、多くの事に気付かせて頂きました。私はその気付きについて、次の様な思いを強くしております。それは、私たち人間の存在意義の根底にあるものは、“愛”と“不安”の 2 極の心の在り方だという事です。“愛”と“不安”は相対するものでありながらも、又一对のものでもあるという事です。負の思いを創出する“不安”があるからこそ“愛”を感じ、“愛”から私達が感じる全ての幸福感が創造されて行くのです。又、“愛”から私達が感じる幸福感は、人それぞれ皆違うことも気付かせて頂きました。次の図. 13 不安と愛をご覧ください。

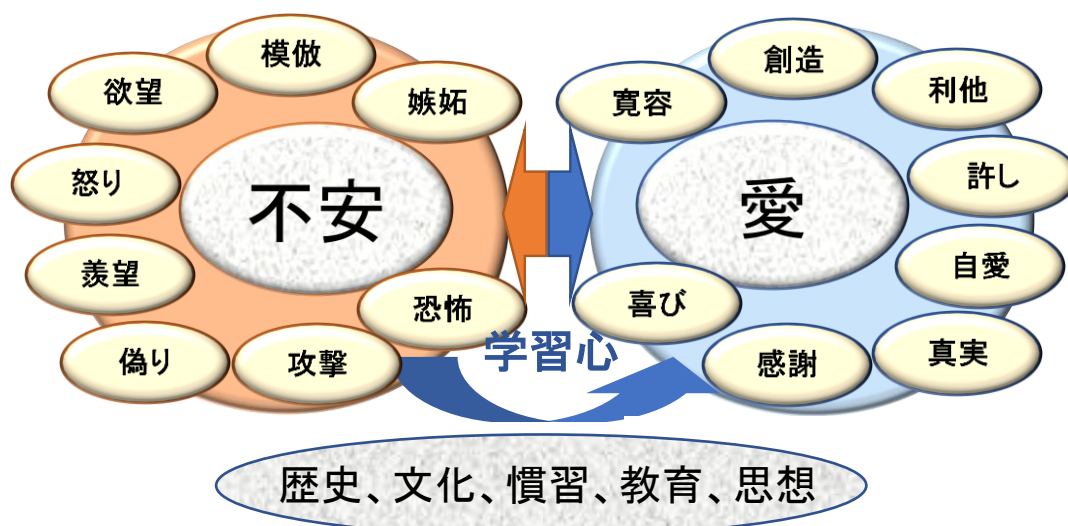


図. 13 不安と愛

私たちの全ての負の思いを取り除くことが出来るのは、“愛”そのものです。地位、名誉、金ではないことを心から思います。勿論、今の社会で生き抜くためには、相応の地位、名誉、金が必要でありましょう。しかし、これは、今の社会の在り方を肯定した上での捉え方であります。経済至上主義を超越したところにある、本来の豊かな社会とは、どのような社会でありますでしょうか。それは、誰もが人として生きる意味、生きる意義、そして、「生命」としての存在を感じ、それを受け止めることが出来る社会、それぞれの幸福感に触れることが出来る社会といえるのではないのでしょうか。この様な社会は、歴史、文化、慣習、教育、思想等を意識し、不安から創出される負の事象から多くを学習し、気付くことで、“愛”という存在が不安を寄せ付けない社会であります。

私たち人間は、歴史から多くを学び、気づき、認識し、そして、教育を通して、真の幸福感に触れることが出来る社会の創出を、現実なものとして行かなければなりません。何千年も経過した人間の歴史の中で、現在も争いが絶えず、様々な形で多くの命が奪われ、

又、多くの人が自ら命を絶ち、多くの人が生きる上での苦しみを感じている社会。経済的自己利益を最優先した結果の姿かも知れません。私たちは、目に見える世界で起きる事象と、その結果に固執し、物質的蓄えを所有物として蓄積することに力を注ぎ、正に人生の目的が所有物の蓄積と言っても過言ではないような生活を、いつの間にか送って来てしまっておりま。

全ての生命が共有する、地球という星のもとに生まれた私たち。私は思います。この地球になぜ、生命が芽生えたのか。なぜ、人間だけが吐出した自意識を持っているのか。なぜ、数千万種といわれる膨大な種がうまれたのか。科学的な知見だけでは推し量れないものを感じます。目に見える対象のみが存在する全てであると、捉える視点からは、私たちが、この地球に生まれて来た、真の意味を見出すことは難しい様に思います。脳、或いは身体のみが私たちの言動を支配しているとは思えないのです。人間の言動を脳や身体の働きのみで捉えた場合には、“心”というものが置き去りになってしまう様に思います。

7万人の子ども達との触れ合いと、4万人の子ども達から頂いた手紙に触れて、私は目に見えない“心の働き”を感じるのです。5.7.2 金子みすゞと命の項目でお示しした、約百年前にこの世に生を受け、「生命」への思いを心から発現し続けた詩人、金子みすゞの詩が、私の心に真の生命の姿を投げ掛けて来ます。私たちの脳や、体を通しても見えないものが存在する。目に見えないものにこそ大きな存在価値が内在していることを示唆している。そこに、「生命」に関する大切な思いを見出している、金子みすゞの心を深く感じるのです。“心の存在”への意識が薄くなって来てしまった今の社会。今一度、“心の存在”を振り返って見る時なのではないでしょうか。

私たちは、バラバラではなく、本来、心を通じて一つに繋がる事が出来る存在。私は私の命が続く限り、子ども達と「生命」の触れ合いを続け、“愛”が根底にある社会の実現に力を注いで参ります。何時か、人類がすべての生き物から真の尊敬を受けるまで。

(参考文献)

- i 『平成 29 年度自殺対策白書』：厚生労働省。
- ii 『平成 28 年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」(速報値)』：文部科学省
- iii 猿渡瞳『瞳スーパーデラックス』(2005) 西日本新聞社
- iv 金子みすゞ『金子みすゞ童謡全集』(2004) JULA 出版局